各論02

横浜美術館のコレクションについて

松永真太郎 | 学芸グループ長、主席学芸員

はじめに

横浜美術館の作品・資料収集活動は、美術館開館から遡ること7年、昭和57（1982）年度にスタートしている。その前年度に、収集すべき対象・範囲を定めた「収集方針」、作品購入の原資となる「横浜市文化基金」という、収集活動におけるいわば二大要件が横浜市によって整備され、それらに基づいて、今日まで多様な美術作品・資料の収集を続けてきた。収蔵品点数は令和4（2022）年度末現在、1万3000点余に上る。

当館は令和元（2019）年度に開館30周年を迎え、いくつかの記念事業を実施したことはなお記憶に新しいが、現在、収集活動においてはすでに40年の節目を超えたことになる。この機に改めて当館のコレクションの概要と現況を俯瞰してみたい。

1. 収集方針

美術館の収集活動は、館ごとに設定された「収集方針」に基づいて行われる。

以下、昭和57（1982）年に横浜市美術館基本構想委員会が策定した「横浜市美術館の基本構想のあり方について　答申」から、横浜美術館の「美術資料の収集方針」を引用する。

近代及び現代美術の流れが展望できる内外のすぐれた美術資料を体系的に収集する。

（1）西洋文化の流入窓口であった横浜開港当時からのヨーロッパ近代美術と日本近代美術の相互影響の足跡がたどれる作品。

（2）①現代美術の展開と流れの眺観に役立つ作品。

②今日の美術が内包する問題点を明確に表している作品。

③近代美術の一分野としての写真の代表作品。

④現代の市民生活に密着した分野（デザイン、工芸、建築、ビデオ）の代表作品。

（3）横浜ゆかりの代表的作家の作品。

①岡倉天心との関係を含めて、原三溪に庇護された、日本近代美術の発展に寄与した作家の作品。

②その他、横浜ゆかりの代表的作家の作品。

（4）以上の美術に関連する資料。

ここに列記された項目について、補足を加えながら個々の要点を整理してみる。

まず（1）では、近代美術におけるヨーロッパと日本の影響関係という観点に基づく独自性のある方針が、「開港の地」横

浜の土地柄との接続によって示されている。これはコレクション全体に通底する（分野を問わない）ベーシックなテーマ設定という意味で、当館の大きな特色と言っていい。

（2）では、四つの細目を通して「近代」および「現代」という収集対象とすべき時代範囲があらためて規定され、そのなかで「写真」と「現代の市民生活に密着した分野」という、これまでの国内の美術館でなかば等閑視されてきた分野も射程に収める旨が表明されている。

（3）では、地方公立美術館の使命と言える、それぞれの地域の作家・創作活動の顕彰という趣旨に則り、ゆかり作家の作品の収集が謳われ、そのうち岡倉天心（本名：覚三。1863-1913）や原三溪（本名：富太郎。1868-1939）のゆかりの作家が特出されている。

そして（4）では、収集対象を「作品」に限定せず、収蔵作家や作品に関連する諸資料も併せて収集することが謳われている。

美術館のコレクション形成には概ね二つのケースがある。その核となるべき美術品群があらかじめ存在し、それを補充・拡張するかたちでその後の収集を積み重ねていくケース（企業コレクションに基づく美術館や、大規模な個人コレクションの自治体への寄贈に端を発して設立された美術館がそれにあたる）と、先立つものが何もないケースである。横浜美術館の場合は後者、つまりゼロからのスタートであった。それゆえに、純粋に「横浜の美術館として望ましいコレクション」を目指して方針が検討され得た、とは言えるだろう。そして策定された方針自体も、「近・現代」という時代範囲以外には厳格な制約をもたない、至極開かれたものとなっている。

2. コレクションの特色

しかし、限られた収集予算の中で、上記のような緩やかな方針の下に収集活動を行うことには、館としての特色が不明瞭な「広く浅い」コレクションが形作られる危惧がつきまとう。その懸念もあってか、収集活動が具体的に動き出してほどなく、コレクションをより特色づけるための重点領域の絞り込みがなされている。主に次の三つの趣旨に要約されるだろう。

①両大戦間の欧米の前衛美術、とりわけダダ、シュルレアリスムの作品群
②岡倉天心が創設した日本美術院を中心とする日本画の作品群
③日本最初の写真館が開かれた土地のひとつという史実を踏まえた、写真史を網羅する作品群

これに加えて、幕末から明治初期に活躍した五姓田派や高橋由一等の作品、横浜ゆかりの世界的彫刻家、イサム・ノグチの作品、横浜生まれの国際的な版画家、長谷川潔の作品、小島烏水（本名：久太。1873-1948）旧蔵の西洋および幕末明治の版画といった、「横浜ならでは」といえる作品・資料群が、大規模な寄贈等、折々の収集を機縁としながら、コレクションの一角を形作ってきた。

以下、あらためて分野ごとの収蔵点数と特色をまとめてみる。

◯［西洋画］約80点

第一次・第二次の両大戦間のヨーロッパ前衛美術に焦点を当てている。とくに、ジョアン・ミロ（1893-1983）、サルバドール・ダリ（1904-1989）、マックス・エルンスト（1891-1976）ら、この時代の中心的な芸術運動であったシュルレアリスムの絵画は、当館コレクションのハイライトのひとつとなっている。

◯［日本洋画］約480点

幕末から明治期にかけて活躍した五姓田派や高橋由一（1828-1894）にはじまり、戦後の具体美術協会やネオ・ダダ等の前衛美術家を経て今日の作家まで、横浜ゆかりの作家を中心に、日本洋画史を概観できるコレクションを目指して収集している。

◯［日本画］約950点

岡倉天心が創設した日本美術院の画家、原三溪が庇護した画家たちの作品を中心に、近・現代の作品を収集している。なかでも下村観山（1873-1930）は重点的に収集・研究を重ねているゆかり作家であり、画稿や資料を含め400点を超えるコレクションを有する。

◯［版画］約4200点

日本の版画は、明治以降の作品を中心に収集。横浜生まれの銅版画家、長谷川潔（1891-1980）のコレクションも大きな特徴。西洋の版画は、小島烏水旧蔵のコレクションを核として、ポップ・アート周辺の作家の作品群も見どころのひとつ。

◯［写真・映像］約4800点

写真技法草創期から現代にいたる世界の写真史を通覧できるコレクションを目指して収集を行っている。分野別にみれば最も多くの収蔵品を蓄積してきており、当館のコレクションの大きな柱となっている。

◯［彫刻・立体］約120点

オーギュスト・ロダン（1840-1917）以降のヨーロッパを中心とする近代彫刻に加え、横浜ゆかりの世界的彫刻家、イサム・ノグチ（1904-1988）の作品群も当館の看板となっている。また、現代の多様な立体、インスタレーション作品の収集も行っている。

◯［工芸］約200点

作家が自身の工房で制作する「スタジオ・ガラス」のコレクションに特色がある。また、宮川香山（1842-1916）をはじめ、明治期に真葛焼（マクズ・ウェア）の名で世界に名を馳せた輸出用陶磁器も積極的に収集している。

3. 現況と課題

平成元（1989）年の開館時点での収蔵品数は、約3000点であった。つまり、開館以降の33年ほどの間にさらに1万点余を積み上げたことになる。数の上では堅調な収集活動が続いているように見えるが、開館前と開館後では作品購入に充てられた文化基金の額に大きな開きがあるのが実情である。とりわけ2000年代以降においては、収集内容の大半が篤志家、作家自身や遺族からの寄贈品で占められている。現在の収蔵品約1万3000点のうち寄贈品の点数は半数を超える約7500点であり、文化基金の積立が極めて乏しい現況に鑑みれば、コレクションに占める寄贈品の割合は今後ますます増加していくことが予想される。

◎継続的な収集について

美術館開館以降の作品購入の停滞が招いた状況のひとつに、コレクションにおける1990年代以降の作品の相対的な不足が挙げられる。国内の現代作家の作品については、開館後も少なからず寄贈や購入の実績があるものの、こと海外の現代作家の作品については、購入はおろか受贈の機会もまれであり、収集がほとんど進んでいない状況にある。

そのことが図らずも露見したのは、当館の改修工事による休館前のクロージング展として開催された「トライアローグ：横浜美術館・愛知県美術館・富山県美術館　20世紀西洋美術コレクション」展（令和2（2020）年－令和3（2021）年）においてであった。タイトルのとおり、3館それぞれのコレクションから選りすぐった20世紀の西洋美術が一堂に会した展覧会であるが、3館が持ち寄った出品候補作品を時代順に並べてみると、世紀終盤、とりわけ90年代以降の作品がぽっかりと抜け落ちていたのである。横浜美術館に前後して開館した愛知、富山両館のコレクションも含めてその傾向はうかがえたが、当館においてはその「欠落」がより顕著であった。

美術館の開館前の時代に生み出された作品は十分に収蔵している一方、開館後、つまり館が活動している時期に新た

に生み出された作品は収蔵できていない、という状況は皮肉である。同時代の美術動向を注視し、その時々に生み落とされた作品をコレクションに加えていくことは、「現代」を射程に収めた美術館にとっては不可欠な作業である。幸いにも当館には、多様な作品・資料の寄贈の打診がコンスタントにもたらされるが、届いたオファーのなかから当館に収めるべきものを選んで収蔵につなげるばかりでは、継続性と計画性をもったコレクション形成には結びつきがたい。

そのような現状認識を横浜市と美術館とで共有し、主体性のある収集活動を展開するために必要な文化基金の継続的積み立ての方途について、今まさに検討を進めているところである。

◎収集方針の考え方について

あらゆるものごとの価値基準は、社会情勢等の変化にともない、時代とともに変転をくりかえす。美術もまた同様である。

さきに引用した「収集方針」は、当館のコレクションにおける不変／普遍の基準と位置づけられるべきものだが、その言葉の端々に、策定当時の固有の表現や価値観が垣間見えるのも事実である。「収集方針」の（2）④において、映像でなく「ビデオ」という言葉が用いられているのはその端的な例であろう。

同様に、「収集方針」の筆頭に標榜されている「ヨーロッパと日本の相互影響の足跡がたどれる作品」という題目は、たしかに開港の地、横浜ならではの特色づけとしてこれまでの収集活動において大いに機能してきたが、観点として前時代的であることは否めない。グローバル化が進み、多様な文化の尊重が叫ばれる今日においては、日本とヨーロッパ（事実上、アメリカを含んだ西欧圏）という旧来の地政学的対立軸の下で美術を捉えようとし続けるのは困難である。さきに、当館における分野の設定（西洋画、日本洋画、日本画、版画、写真・映像、彫刻・立体、工芸の7分野）については触れたが、令和4（2022）年度より、西洋画と日本洋画を統合し、「油彩その他の絵画」とすることとした。「西洋」と「日本」の二項対立から脱却しようとする機運が、ここにも反映されているだろう。

◎時代意識の反映

この20年間は、時代の変化、人々の意識の変化がとりわけ目まぐるしい。混迷を深めるいっぽうの社会情勢や、それを背景に整備された「SDGs」に象徴される人類共通の標語の数々を、この時代のムーブメントとして受け止め、美術館の活動、コレクションに反映していくことが求められている。リニューアルオープンを控えたこの横浜美術館では、そうした課題意識の下で、今後のコレクションのあり方についての議論が活発に行われている。その議論の趣旨は、さきに述べた収集方針と、それに基づいて構築してきたコレクションを十分に尊重しつつ、そこに欠落している領域、より重きを置くべき観点を今日の社会状況や美術史観に照らして洗い出し、今後の収集活動に反映させていくということである。

現状のコレクションにおける「欠落」に相当するもののひとつとして、学芸員の中でもたびたび話題に上るのが、女性作家である。当館の収蔵品の作者の男女比は、おおよそ15対1とされる。20世紀前半までの長い美術史において、どの時代もほぼ男性芸術家によって美術界が牛耳られてきたことを踏まえれば、当館のコレクションがジェンダーバランスを欠いていると一概にはいえない。むしろバランスを欠いたまま連綿と展開してきた美術史そのものを端的に映し出しているともいえよう（実際、他館のコレクションの「男女比」にも大きな違いは見られない）。

しかし、アートシーンにおける女性作家の立ち位置が以前とはまったく異なるフェーズにいたった今日、活躍中の女性作家をフォーカスすることはもちろん、遡って以前の各時代において埋もれそうになりながら奮闘していた女性作家たちに光を当てるという作業もまた、この時代だからこそ求められるものだろう。

おわりに

本稿では、横浜美術館のコレクションの概要を俯瞰したうえで、収集内容に関する課題について、地理的観点（日本−ヨーロッパという図式からの脱却）、時代的観点（1990年代以降の作品の収集の必要性）、性差の観点（女性作家の作品の収集の必要性）を例に挙げて考察した。いずれの観点も、目下の当館における収集活動のあり方に関する議論の折々で、今後の収集において重点を置くべきテーマに挙げられているものである。

とはいえ、それらもまた、必ずしも不変の価値基準ではないことは、意識にとどめておくべきだろう。100年スパンでのコレクションの形成にあたっては、都度、コレクション自体と、それをとりまく環境・条件変化の把握、つまりは内的・外的な現状の見定めが不可欠である。蓄積されたコレクションが今どのような地点にあるのか。そのなかで大きな欠落がどこにあり、さらに重点を置く（特色づける）べきポイントはどこか。ある分野や作家のまとまった収集がなされることでまた状況が変化し、今後の方針に見直しが加えられる場合もある。もちろんその時々の文化基金（購入予算）の状況も踏まえなければならない。収集方針を拠りどころにしつつ、そこに都度、時代に応じていくつかの視点を加除していくという「微調整」を重ねながら、収集活動は続く。そうして新たに加わっていく個々のコレクションが、すでに収蔵されている作品と新しい関係を紡いでいき、コレクション全体の輪郭を絶え間なく変化させていくのである。

ここからさらに40年後、さらに成長した横浜美術館コレクションは、どのような姿かたちをしているだろうか。